Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-29

豊島与志雄研究

河内，美帆

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2025-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第9076号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496357

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論 文 題 目　　**豊島与志雄研究**

氏　　名　：　河内美帆

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名　（主）　梶尾文武 准教授

（副）　樋口大祐 教授

（副）　大橋完太郎 教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

本論は、豊島与志雄の作品の分析を通してこの作家の創作の特徴を見出すとともに、それが文学史や同時代と結んでいる関係を探り出す取り組みである。

マイナー作家というのが豊島に従来与えられてきた位置づけであり、そのような作家像にあわせて彼の創作もまた正統な文学史からは縁遠い孤立した営みとみなされるのがつねであった。しかし、豊島の諸作はそれぞれ、発表された当時の文学や文壇、または社会の状況に参与しようとする意志を潜ませている。豊島が創作のなかで何に対してどのように呼応したかを追究することは、各時代の文学や社会情勢の相対化につながるものでありうる。また、これまで見落とされてきたその創作の位置づけを検討し直すことは、近代文学史上の死角を照らす糸口となりうる。こうした見通しのもと、本論では豊島の小説作品を発表年順に、二部六章と補論からなる構成で論じていく。各部各章の概要は以下の通りである。

第一部では、豊島の創作活動の約三分の一を占める大正期に発表された作品群を対象に、この作家の作風とその特質を確認する。

東京帝国大学在学中に第三次『新思潮』へ参加したことを皮切りに、豊島は作家として歩みだした。第一章「象徴主義への接近と逆行――第三次『新思潮』時代の豊島与志雄」では、豊島のデビュー時期の作品群を取り上げ、この作家の創作活動の原点が文壇および自身の周囲で流行する思潮への恭順を装った反抗にあったことを明らかにする。論ずるのは、第三次『新思潮』創刊号に掲載された「湖水と彼等」（大 3）とその翌月に発表され豊島の文壇進出の足がかりとなった二作「恩人」「犠牲」のあわせて三編である。当時の文壇を席巻していたのは明治末期から続く象徴主義であり、新自然主義や大正生命主義とも絡むその巨大なうねりのもとに第三次『新思潮』も生まれた。こうした事象を背景に創出された豊島の上記三編は、それぞれ象徴主義に連なるモティーフを随所に織り込んで『新思潮』内外の文学的な趨勢に即するかのような外観をとりながら、内容においては象徴主義の発想に逆行している。本章では、明治末期から大正初期にブームを巻き起こした象徴主義の様相とともに、それらを豊島の創作が反転させてゆくさまをたどり、同時期の文学史におけるこの作家の初期作品の位置を見定める。

デビュー時期の創作にみられた、新自然主義など複数の思潮を糾合する象徴主義への反発は、以降も変奏されて豊島の小説に現れる。第二章「実話怪談の翻案――「或る女の手記」論」では、既刊の怪談集『妖怪実話』（大 6）中の一編を典拠とする「或る女の手記」（大 9）が、象徴主義と内容を重複させていた新自然主義を、翻案という手段を用いて乗り越えてゆく過程を追う。本作が発表された大正期には、複数の作家たちが神秘主義や心霊科学研究といった海外思潮の受容と流行を背景に怪談風の作品を執筆していた。当時、怪談を重視していた作家の筆頭格だったのが、『妖怪実話』の編者水野葉舟である。自然主義文学者であった葉舟において、怪談への興味はこの頃優勢であった新自然主義の理念に発していた。その葉舟が携わった『妖怪実話』内の一編を、作中人物「私」の手記という形式で翻案したのが本作である。本作は、典拠を細部から微妙に変形してゆき、元の話の結末と完全に相違する結びを用意している。この章では、怪談と自然主義文学との相関関係を水野葉舟の思想を軸に跡づけたうえで、怪談の翻案を通して新自然主義を破る本作の戦略を、「私」の記述行為に照準して解明する。

文学上の流行や既成作家に逆行する豊島の作風は、児童文学ジャンルの創作においても顕著であった。第三章「『赤い鳥』における豊島与志雄童話の一側面――「慧星の話」論」では、『赤い鳥』に発表され

た豊島の創作童話「慧星の話」（大 11）が大正期の児童文学界で覇権を握ろうと意欲した同誌に対して取った逆行の姿勢を分析し、豊島童話の一特徴を見いだす。大正七年に鈴木三重吉が創刊した『赤い鳥』は、文壇の作家たちを巻き込んで児童文学のジャンルに一大転換点をもたらした。芸術運動としての児童文学を『赤い鳥』が主導するなかで豊島も童話の創作を開始し、やがてその主な発表媒体に同誌を選ぶようになる。だが彼の童話の数編がコンセプトとしていたのは、媒体誌が掲げた高さと純粋さという新ロマン主義由来の芸術の理念に背くことであった。それは本作では、ギリシア悲劇の雰囲気と、ドイツロマン派に影響を与えたゲーテとシラーの古典的著作、および広義の道化という主題によって実現される。本章では、新ロマン主義者三重吉が旧来の児童小説や他誌を排撃して成立させた絶対的な児童文学の芸術観を豊島の童話がいかに相対化し、同誌の理想とは別様の「芸術」観を示したかを模索する。

「慧星の話」で表明された『赤い鳥』への反発と道化というモティーフへの関心は、引き続き豊島童話のなかで深められていく。補論「童話「手品師」をめぐって――「道化」の継承／発展と豊島与志雄のニーチェ受容」は第三章の内容の補足であり、「慧星の話」発表の翌年に同じく『赤い鳥』に掲載された「手品師」の検討を通じて、大正期の豊島童話の特性を再度確認する試みである。「慧星の話」で採られた道化のモティーフをより顕在化させて引き継ぐ本作は、とりわけ道化の最も重要な条件であるアイロニカルな性質や動作を結末にかかわるものとして大きく前景化している。本章では、そうした道化の造形がニーチェの思想の上に築かれていることを検証するとともに、その思想を補助線とした場合、本作の結末がニーチェ哲学で目指される一概念に通ずる可能性を帯びることを示唆する。これにより、道化という主題を軸に自由の形を探ろうとする大正期の豊島童話が持つ志向のひとつを改めてなぞった。

第二部では、豊島が昭和期に手がけた諸作を扱い、それらがとる社会の動乱期や転換期への向き合い方を考究する。

第四章「戦時下における豊島与志雄の「自由主義」――「近代伝説」論」では、日中戦争下に参加した中国視察旅行の成果として豊島が発表した中国を舞台とするシリーズ「近代伝説」（昭 15～16）を取り上げ、それらが戦争協力をどう回避したかを論ずる。この中国旅行は、戦争遂行を文化面から支える目的で企画された国策であった。右を一例に文化がさまざまな形で戦争に加担させられるなか、特に有用なものと国家に目されたのが伝説というジャンルである。当時、柳田国男が民俗学の分野で厳密に定義していた伝説は、一方で国民意識を強化し高める効果をもつものと見込まれ、国定教科書の教材として浸透していた。他方で、日満支の提携を図るべく発された内務省の指示のもと、同国の古典や怪奇小説の再話が「支那伝説」の名で流通していた。連作「近代伝説」もこうした大勢に同調するものであるかに見えて、実際には同時代的な伝説の様態から遠ざかるような要素を取り入れ、作中人物の殺人と失踪という展開を全編で執拗に反復している。この章では、本シリーズのそうした特徴が国家の期待した戦時下での有用性をはぐらかすものであることを記述し、豊島の「自由主義」の本質を無用性に見出す。

豊島は「近代伝説」を区切って以降執筆活動自体を縮小していったが、その連作と酷似した名のシリーズを敗戦後に立ち上げ、再び創作に取り組んでゆく。第五章「転形期の「説話」の創出――「近代説話」論」では、敗戦直後の世相と人々を描き出した連作「近代説話」（昭 21～22）に注目し、それらがいかなる在り方をとって近代の説話を名乗ろうとしたか、従来の説話の定義を概観したうえで考察する。近代文学研究の場では、説話風という見方は基本的に既存の説話文学を典拠とする作品のみに向けられてきた。対して本シリーズを構成する作品は一部の例外を除き典拠をとらず、近代文学研究上説話風と

みなされてきたモティーフを持たない。また、説話文学研究者の先行論から抽出できる、話題的興味と目的性という説話の主な条件は、ともに本シリーズから排除されている。このように反説話的と言える姿勢をとる一方で、本シリーズは文体と語り手が用いる人称には、説話の条件の一つとされる語り継ぎの意志を組み込んでいる。本章では、従来の説話の条件を排除すると同時に導入するという動きを本シリーズの要諦と指摘し、豊島のこの試みが持ちうる可能性をより広い文脈に接続することを目指す。

典拠を持たない作品を集める「近代説話」のなかで例外的に既存の物語を翻案した一作が、シリーズで二番目に発表された「沼のほとり」（昭 21）である。第六章「戦後文学としての「怪談」――「沼のほとり」論」では、前章を補完するべくこの一編に着目し、翻案という創作手法がどのように「近代説話」の理念、かつ同作が戦後文学であることにかかわっているかを見てゆく。本作が直接的な典拠とするのは怪談小説の大家田中貢太郎の創作怪談だが、それ自体も複数の既存の物語を受け継いで成った作であった。そのような作品をほぼ変形せずに下敷きとすることで本作は過去から受け渡されてきた物語の流れを作中に引き込むと同時に、結末の後に起こる展開を暗示する仕掛けをほどこすことで元の物語に未来という要素を付け加えてもいる。この章では、本作における翻案が過去から未来へという物語の水脈をつくっている点を浮き上がらせ、豊島が当初から重要な戦略としてきたこの創作手法が「近代説話」の理念の具現と戦後文学としての志向を支えているとの観点を提示する。

以上の各章を通して、本論では豊島与志雄の文学が同時代への批判的な呼応であり、趨勢を相対化する視座の提案であったことを明らかにした。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	河内　美帆
論 文 題 目	豊島与志雄研究

要　　旨

本論文は、大正期から戦後にかけて持続的に創作活動を展開した文学者・豊島与志雄の小説作品を主な対象とする作家研究である。著者は、従来の文学史では孤立した存在と見なされてきた豊島に、むしろそれぞれの時代における文学的思潮に対しての批評意識を見ようとしている。すなわち本論文は、豊島の創作が各種の典拠を用い、批判対象と酷似した表現や結構を採りながら時代の文学的動向に対抗していることを明らかにするものである。かかる問題意識と全体の梗概を提示した「はじめに」に続く本論は、二部七章から構成される。

第一部の考察対象は、豊島の大正期の作品群である。第一章「象徴主義への接近と逆行」は、豊島の作家としてのデビュー作「湖水と彼等」と、ほぼ同時期に書かれて文壇進出の契機となった「恩人」「犠牲」の三編を取り上げ、それらが同時期に文学全域を覆い尽くした象徴主義、およびそれと密接に関係のある新自然主義に対して試みた位置取りを記述する。これらの作品が第三次『新思潮』を中心とした象徴主義に属する文学者たちのテクストを参照していることを考証しつつ、象徴主義的な融合の感覚を概念的には知りつつもそれにあえて逆行し、内面への沈潜を拒む人物を主人公に選んでいることが明らかにされる。このような考察を踏まえて、著者は、これらの作品が象徴主義を論じる言説を作品に引き込みつつ変形するという創作方法によって形づくられたと主張する。

第二章「実話怪談の翻案と新自然主義」では、既刊の怪談作品を翻案した短編「或る女の手記」が検討対象とされる。著者はここで、本作が水野葉舟編『妖怪実話』所収作を藍本としていることを、人脈と表現の双方から実証している。その上で著者は、怪異的な現象を幻覚というフレームに囲い込む「私」の記述行為を介在させることによって、本作が怪談を創作に仕立て直していると論ずる。本論前半の眼目は、明治末期以来の象徴主義の興隆という文脈に豊島を定位することに置かれているが、この章では怪談というジャンルの流行現象という角度からこの問題に接近しようとしており、その試みは奏効していると言える。

第三章「『赤い鳥』における豊島与志雄童話の一側面」および補論では、豊島における児童文学の実践が検討される。第三章では『赤い鳥』に発表された「慧星の話」を論ずる。大正期の児童文学界にて覇権を志向した『赤い鳥』が「純」なるものと「高さ」を価値化していたのに対して、豊島がいかなる方法で距離を取ったかを検討すべく、著者は、本作に見られるシラーやゲーテの作品からの影響や、アナトール・フランス「聖母の曲芸師」との類似性について考証している。さらに、作品に通底するものとして「飛び下り」のモティーフがあることを指摘し、対立する二極を併せ持つ「雑」なものに美しさを宿らせることで、『赤い鳥』が絶対的なものとして提唱する「純」の理念とは別の児童文学の創出を豊島が志向していた、と著者は主張する。補論は第三章の内容を補足するものであり、同じく『赤い鳥』に掲載された「手品師」から大正期の豊島童話における「道化」の主題を論ずる。ここではニーチェ思想の受容が考証され、より広い大正期の思想的動向のなかに豊島を定位する視角が提示されている。

主査記載 氏　　名	樋口　大祐

第二部では、昭和期の豊島作品が口承文芸の近代的展開という観点から論じられる。第四章「戦時下における豊島与志雄の「自由主義」」は、日中戦争下に発表された連作「近代伝説」を考察対象とする。柳田国男の伝説概念や、教科書に見られる国民性の陶冶という基準に沿った伝説観、中国を舞台とした「支那伝説」をめぐる言説が参照され、この連作との繋がりを探る。その上で、中国を舞台としたこの連作が殺人や失踪といったモティーフを反復していることに着目し、伝説というジャンルが必要条件している継承性・伝達性が物語内容のレヴェルで否認されていると論ずる。侵略戦争の時代にこの作品群が中国という舞台を選んだことには、豊島の政治的なリベラリズムよりもむしろ無防備さがよく表れていると論じ、作中の中国は、同時代の現実と切り離された夢想上の「支那」に仕立て直されており、この点で豊島の共同体からの断絶と孤絶を表徴している、と著者は主張する。

第五章「転形期の「説話」の創出」は、敗戦まもなく豊島が取り組んだ連作「近代説話」について、「説話」という概念の一般的な条件に照らして考察している。1970 年代の文学研究において提起された「近代説話文学」というジャンルに関する言説を踏まえた上で、豊島のこの連作では、いずれも「です・ます」体の語りによって説話性が装われていること、その一方「近代小説」的手法が駆使されている点で反説話と呼ぶべき性格を備えることが指摘される。

第六章「戦後文学としての「怪談」」では、「近代説話」の第二作として発表された「沼のほとり」を取り上げる。本作が田中貢太郎の怪談小説を典拠としていることが考証され、そこで採られる怪談の結構とシリーズ内での例外的な創作手法とが「近代説話」の理念といかにかかわっているかが考察される。花田清輝が本連作に「近代以前の説話文学をスプリング・ボードにして、近代小説から飛躍したいという作者のはげしい意欲」を見ていたことに注目する著者は、第五章および六章の論述を通して、花田も指摘する「近代小説と説話文学の衝突」という性格をより具体的に捉え直している。また著者は、豊島の「近代説話」と、この作家に親炙した坂口安吾や太宰治ら後続世代における創作説話との差異についても示唆している。近代文学における説話あるいは口承文芸という問題系により広くかつ具体的にアプローチしてゆくことが、今後の課題として残されている。

本論文はこのように、豊島与志雄の 1910 年代から 40 年代までの小説作品についての考察を展開し、近代文学史上のミッシングリンクとなってきたこの作家を歴史的に定位することに成功している。作品分析とあわせて、同時代の文学的・政治的・社会的言説を累集しそれらを検証する論考は、近代文学史の優れた記述たりえている。また、粘り強い文献調査を継続し、それぞれの作品の隠れた典拠を明らかにしえている点も、この研究の実証性の高さを担保している。作家の個人研究としてのみならず、近代文学史研究として深い意義を持つ貴重な成果であると評価することができる。

上記のような評価に鑑み、本審査委員会は、論文提出者・河内美帆氏が、博士（文学）の学位授与にたる資格を有するものと判断した。

審査委員

区　分	職　名	氏　　名	区　分	職　名	氏　　名
主　査	教授	樋口　大祐	副　査	人間発達環境学研究科 准教授	目黒　強
副　査	教授	大橋　完太郎	副　査	明治大学国際日本学部 教授	小谷　瑛輔
副　査	准教授	梶尾　文武			